

夏休みを利用してタヒチへの旅行へ向かう葛飾署の一行。

麗子が誕生日プレゼントとして貰ったクルーザーに女子署員と中川は乗船し優雅な船旅。

対照的に、両津らは館船でのタヒチ旅行と言う過酷な旅となっていた。

何にしても中川の乗るクルーザーには美人署員が多数乗って降り、ある種のハーレム状態になっていた。

「それにしても凄いな。こんな船を誕生日の貰うってスケールが違うよ」

その船の中。長く艶のある綺麗な黒髪を後ろで纏めた、気風のいい美女、擬宝珠 纏が水着姿で驚きの感想を零していく。

「麗子さんのお父さんは、娘愛が強いんですわ♥ 纏さん船酔いは大丈夫ですか？」

「あ、麻里愛さん。うん、乗り物酔いはしないし、この船ほとんど揺れないから大丈夫だよ」

そんな纏に声をかけるのは麻里愛。

綺麗な長い黒髪にやや際どいビキニ姿で非常にスタイルの良い身体を見せつけていた。

纏もスタイルは良いのだが、麻里愛の方が元男とは思えないほどに見事なスタイルをしている。

それは、つつい見気もないのに纏の視線が麻里愛の胸元や腰のラインを見てしまうほどに。

「……………は〜…………」

「そんなにジッと見られると恥ずかしですわ……♥」

「っと、ごめんごめん！ あんまりにもいい身体してるからついっ！ほんとごめん、これじゃあだし勘吉と変わんないや」

恥ずかしそうに麻里愛は胸元を自分の手で隠して視線を遮り、それに纏は少し顔を赤くしながら謝罪をしていく。

だけど、麻里愛の身体は同性でも見てしまいたくなるようなスタイルなのは間違いなかった。

「いや、あたしは女らしくないから、つい、ついね」

「そんなことはありませんわ。纏さんも十分に女らしくて素敵ですわ♥」

「そ、そうかな？ あはは、美人に褒められると悪い気がしないね」

そんな会話を仲良く繰り広げる2人の水着姿音美女婦警の元に、このクルーザーで唯一の男である中川も近づいてきて会話に参加していく。

船の中と言う事もあり、中川もまた水着にシャツのラフな姿でこれからの度について楽しく会話を繰り広げていたのだが――。

“グラッ！”

――不意に、船が強めに揺れた。

瞬間。足元をフラつかせた中川は咄嗟に近くにいた纏に手を伸ばしてしまう。

その際に、偶然水着を掴んでしまい倒れこみそうになったこともあり脱がしてしまう。

“ぶるんっ♥”

「っ？！ きゃあああ！ ちょっと、やめてくれって！ 脱げて、っあ！」

「っえ？ あ、ご、ごめん！ っとお！」

中川の手によって脱がされてしまった纏。

その大きめの胸が露出して、ツンと上向きの美乳が丸見えになってしまった。

それに顔を真っ赤にしながら片手で胸を隠した彼女だったが、纏もまたバランスを崩していく。

その際に、2人を助けようとした麻里愛の水着を掴んでしまい今度は纏が水着を脱がしてしまった。

「っあ！ 取らないでくださいまし！ お胸が……！」

「あっあ！？」

もう状況的には混乱状態。

纏と麻里愛は水着の上を脱がされてしまい、それぞれ形の良い胸を露出。

そしてバランスを崩して、中川は纏に正面から抱き着くようにくっついてしまい、麻里愛はその大きな胸を“ぽにゅっ♥”と中川の背中に押し当てている。

美女2人に挟み込まれる形になった中川だけど、3人が3人ともバランスを崩しており、船の揺れによっては倒れそうになっているので下手に動けないでいた。

微妙な硬直状態が数秒続いていく中で、纏はあることに気がついて顔をしかめた。

「ちょっと、中川さん……………あたしに当たってるんだけど…………」

「え?! あ……本当にごめん! でも、今は動けなくて……!」

「それはわかってるけどさ、こんな状況で……」

中川の股間は明らかに勃起してしまっていて、それを抱き着く形になった纏に押し当ててしまっていたのだ。

上半身裸の美女に抱き着き、背中には麻里愛の爆乳。

興奮してしまっても仕方がないとも言える状況だった。

そこに、船内の状況を見て回る麗子の声と足音が近づいて来た。

別にただの事故ではあるけれど、この状況を誰かに見られたくないと判断した3人は咄嗟に近くの物陰に隠れ込み更に密着を強めていく。

その際に、今度は中川の水着もズリさげられてしまいチンポを露出してしまった。

纏と正面から抱き合う形になった中川は股間を押し当てないように腰を引こうとすれば――。

「あんっ♥ あんまり動かないでください、まし……♥」

「麻里愛さんっ……!」

――背中抱き着く形に爆乳を押し当てる麻里愛から甘い声が響く。

結果、纏に股間を押し付けたまま身動き取れなくなってしまった中川。

そのまま静止していれば何の問題もないのだが、船の揺れは継続していき、纏のスラッとした腹に股間を押し付けて擦り付ける形になってしまっていた。

「っう……」

「ちょっと……中川さんののが当たって、擦れてんだけど……」

「ごめん、今はっ……う!」

擦り付けられる熱いチンポに嫌そうな顔をする纏。

腹に付着するカウパーに溜息をもらすしかない状況で、中川は船の揺れに合わせて擦れてしまうチンポが射精してしまわないように耐えていく。

謝罪して必死に耐えるしかない中川だったのだが、しばらくの小さな揺れの末に大きな揺れが船を襲った際に――。

「っ！？ キャアアア！」

「麻里愛さ、っあ！」

——背中に胸を押し当てていた麻里愛がバランスを崩して中川の身体を押した。

爆乳を“ぼたゅっ♥”と強く押し付けての密着。

その刺激を引き金に、耐えに耐えていた中川は“びゅるる！”と纏のお腹に精液を吐き出してしまう。

「っあ……」

「……………」

我慢しきれずに漏らしてしまった精液。

それに纏が気づいて沈黙。

中川が射精の余韻の中で謝罪するより先に——。

「キャアアアアアアア！！！」

——纏の女らしい悲鳴が船内に響いていったのだった。